

## 多職種による災害後の心のケアに関する研修会の効果について

著者	小林 朋子, 江口 昌克, 今木 久子, 斉藤 純子, 吉永 弥生, 石川 令子, 中垣 真通, 土屋 廣人
雑誌名	静岡大学教育実践総合センター紀要
巻	24
ページ	103-107
発行年	2015-03-31
出版者	静岡大学教育学部附属教育実践総合センター
URL	<a href="http://doi.org/10.14945/00008927">http://doi.org/10.14945/00008927</a>

## 多職種による災害後の心のケアに関する研修会の効果について

小林朋子\*・江口昌克\*\*・今木久子\*\*\*・斉藤純子\*\*\*\*・吉永弥生\*\*\*\*\*・石川令子\*\*\*\*・中垣真通\*\*\*・土屋廣人\*\*\*\*\*

### Effect of a multidisciplinary training workshop related to mental health care after a disaster

Tomoko KOBAYASHI\*, Masakatsu EGUCHI\*\*, Hisako IMAKI\*\*\*, Jyunko SAITO\*\*\*\*, Yayoi YOSHINAGA\*\*\*\*\*, Reiko ISHIKAWA\*\*\*\*, Masamichi NAKAGAKI\*\*\*, and Hiroto TUCHIYA\*\*\*\*\*

#### Abstract

At the time of large-scale disasters, by taking advantage of all human resources in order to promote the reconstruction of the region, it is necessary to build a support system in the region to preempt future disasters. This study, in preparation for a large-scale disaster, revealed the effect of training workshop content related to mental health care in collaboration with a multidisciplinary team. This workshop was conducted twice and targeted clinical psychologists, public health nurses, and school nurses. The contents of the workshop were not only clinical psychology, but also lectures from the person in charge of disaster prevention and administration. The group work had been organized by the same region and multidisciplinary mix, thereby expanding the regional network throughout the workshop. Evaluation of the workshop showed an increase in the knowledge of the victims, reduced anxiety for the supporters, and increased self-efficacy for support activities. In particular, for the public health nurses who attended the training, self-efficacy for consultation was elevated.

キーワード： 多職種、災害、心のケア

#### I. はじめに

南海トラフ巨大地震の震源域にあたる静岡県は、1970年代から多くの防災対策がなされている。しかし、建物の耐震化などのハード面の対策は進んでいるものの、心のケア体制に関しては不十分な点が多い。東日本大震災のような大規模災害時には、行政だけでなく民間の力も合わせ、あらゆる人的資源を活かして地域の復興を進めていく必要がある。

静岡県臨床心理士会は、2010年に静岡県と「災害時の心のケアに関する協定」を締結し、災害時には県からの依頼を受けて、地域の保健師をサポートしながら地域住民の心のケアを行うことになっている(土屋, 2013; 小林・櫻井・中垣・長島・今木・石川・吉永・江口・福永, 2011)。地域で主に心のケアを行うのは、保健師や教師などの支援者である。

しかし、これまでに被災したことがない地域の支援者にとって、災害時のメンタルケアに関しては知識や経験も不十分であることが多く、そのためいざ災害が発生すると非常に混乱してしまうことが考えられる。実際に、被災者支援の経験がないカウンセラーを対象とした調査で、被災者支援に対する多くの不安があげられている(長島・小林・今木・中垣・吉永・石川, 2010)。そうしたこともあり、静岡県では心の専門家である臨床心理士が、保健師などの地域の支援者と共に、地域での心のケア活動を行う体制を作り、より多くの地域住民が早い段階で、適切なケアを受けることが可能となっている。

Barton(1969)は、災害とその被災者の予後を評価するために、①衝撃の範囲(地理的、あるいは被災者の数)、②発生スピード(突然、緩徐、慢性的)、③衝撃の期間(エピソードが繰り返される場合)、④コミュニティ内の準備状態の4つの要因について検討しなければならないとしている。このことから、災害が起きてからではなく、災害が起こる前に、地域における支援体制を構築しておく必要

\*静岡大学教育学部 \*\*静岡大学人文社会科学研究所  
\*\*\*静岡県立吉原林間学園 \*\*\*\*静岡県スクールカウンセラー  
\*\*\*\*\*岩手県巡回型スクールカウンセラー  
\*\*\*\*\*常葉大学短期大学部

がある。そこで本研究は、南海トラフ巨大地震のような大規模災害に備えて、多職種(臨床心理士・保健師・養護教諭)との協働による心のケアに関する研修会を開催し(主催:静岡県臨床心理士会被災者支援本部)、その効果を検証した。

## II. 方法

### 1. 対象者

静岡県内の臨床心理士、保健師および養護教諭を対象とし、2回の研修会を行った。

### 2. 研修内容

研修は、臨床心理学的な知識だけではなく、防災の専門家を講師として招き、地域の実情をふまえてケアが進められるようにした(表1)。また、毎回1回の演習を取り入れ体験的に学べるよう工夫した。また実習のグループは、同じ地域でかつ多職種混合によるグループ編成とし、本研修会を通して地域ネットワークが広がるよう配慮した。

表1 研修会の内容

#### 【第1回(2012年6月30日)】

- ・東海地震の現状と防災に関する基礎知識(防災を専門とする大学教員による)
- ・災害後の心身の反応
- ・演習「心理教育」集団への支援の実習

#### 【第2回(2012年8月18日)】

- ・支援者のメンタルヘルス
- ・ストレスマネジメント
- ・演習 ストレスマネジメント実習

### 3. 研修効果に関する評価方法

#### (1) 研修内容に関する評価

2回の研修会終了後に、「わかりやすい内容であった」「新しい知識や考え方、技術が身につく内容であった」「内容の難易度は妥当であった」および「総合的に判断して、満足のいく内容であった」に関して、

「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」の5段階で尋ねた。

#### (2) 研修の効果に関する評価

##### 1) 調査内容

「被災者支援に関する知識尺度」、「被災者支援に対する不安尺度(小林・中垣・石川・吉永・長島・今木, 2011)」、「(下位尺度は、「支援活動」、「自分自身」の2因子)、および「被災者支援に関する自己効力感尺度(小林・中垣・石川・吉永・長島・今木, 2011)」、「(下位尺度は、「コンサルテーション」、「個別」、「セルフケア」、「実技」の4因子)、を用いた。

##### 2) 対象者および手続き

①非受講群: 本調査の目的を文書等で伝え、調査協力が得られた静岡県外の臨床心理士40名、保健師40名および養護教諭32名に対して郵送法により調査を行った。アンケート調査は、PREテストを2012年4月から5月に、POSTテストは2012年8月から9月にかけて2回行った。

②受講群: 研修会案内および研修会当日に本調査の目的を口頭で伝え、受講者に協力を依頼した。

## III. 結果および考察

### 1. 研修内容に関して

#### (1) 研修会参加者の人数と属性

第1回参加者は58名(臨床心理士19名、保健師14名、養護教諭25名)、第2回参加者は43名(臨床心理士17名、保健師10名、養護教諭16名)であった。対象者の性別は各回とも男性10%、女性90%程度であった。経験年数は各回とも5年以下、6-10年、11-19年、20-29年、30年以上の各年代において20%程度であった。

#### (2) 内容に関する評価

研修会の評価を表2, 3に示す。第1回研修会では「わかりやすさ」、「総合的満足度」において「とてもそう思う」との回答は75%を超えていたが、「難易度の妥当さ」、「新しい知識・技術習得」において「とてもそう思う」との回答は60%程度に留まった。

表2 第1回研修会の評価

		とても そう 思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない
わかりやすい内容であった	%	84	16	0	0	0
	N	42	8	0	0	0
新しい知識や考え方、技術が身につく内容であった	%	60	38	2	0	0
	N	30	19	1	0	0
内容の難易度は妥当であった	%	64	28	6	2	0
	N	32	14	3	1	0
総合的に判断して、満足のいく内容であった	%	78	20	2	0	0
	N	39	10	1	0	0

表3 第2回研修会の評価

		とてもそう思う	ややそう思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない
わかりやすい内容であった	%	86	14	0	0	0
	N	37	6	0	0	0
新しい知識や考え方、技術が身につく内容であった	%	60	40	0	0	0
	N	26	17	0	0	0
内容の難易度は妥当であった	%	74	26	0	0	0
	N	32	11	0	0	0
総合的に判断して、満足のいく内容であった	%	81	19	0	0	0
	N	35	8	0	0	0

参加者からは「顔の見えるグループワークが良かった」、「心理教育の模擬発表体験では知識の整理に役立った」などの感想が挙げられた。第2回研修では、「わかりやすさ」、「難易度の妥当さ」、「満足度」において「とてもそう思う」との回答は75%を超えていたが、「新しい知識・技術習得」において「とてもそう思う」との回答は60%程度に留まった。参加者からは「支援者への支援の重要性がわかった」、「実際に体験し自信が持てた」などの感想が挙げられた。目新しい知識や技術への評価よりも、体験・交流することへの高い関心と評価が得られたと考えられる。

2. 研修効果に関して

(1) アンケートの回答者の概要

PREテストでは、受講群が51名(回収率88%)、非受講群が96名(回収率86%)、POSTテストでは、受講群が44名(回収率100%)、非受講群が60名(回収率54%)であった。解析には、PREとPOSTの両方に回答した対象者のデータのみを用いたため、受講群および非受講群共に44名であった。回答者の属性は、受講群は男性5名(11.4%)、女性39名(88.6%)、非受講群は男性2名(4.5%)、女性42名(95.5%)であった。回答者の属性については、表4から表8に示す。

表4 回答者の年代

	年代			
	20代	30代	40代	50代
受講群	7	15	11	11
%	15.9	34.1	25.0	25.0
非受講群	7	8	20	9
%	15.9	18.2	45.5	20.5

表5 職種

	職種		
	臨床心理士	保健師	養護教諭
受講群	18	10	16
%	40.9	22.7	36.4
非受講群	12	16	16
%	27.3	36.4	36.4

表6 職務経験

	職務経験					
	1年未満	1-5年	6-10年	11-20年	21-30年	31年以上
受講群	0	8	8	10	12	6
%	0.0	18.2	18.2	22.7	27.3	13.6
非受講群	2	7	2	15	13	5
%	4.5	15.9	4.5	34.1	29.5	11.4

表7 事件事故での対応経験

	事件事故での対応経験				
	全くない	少しある (1-2件)	ややある (3-5件)	かなりある (6-10件)	非常に ある (11件以上)
受講群	30	5	5	3	1
%	68.2	11.4	11.4	6.8	2.3
非受講群	27	9	5	0	3
%	61.4	20.5	11.4	0.0	6.8

表8 災害での対応経験

	災害での対応経験			
	全くない	1件ある	2件ある	3-4件ある
受講群	39	4	0	1
%	88.6	9.1	0.0	2.3
非受講群	33	8	3	0
%	75.0	18.2	6.8	0.0

(2) 研修による効果

本研修による被災者支援に関する知識、不安や自己効力感への影響を調べるために、群(受講群・非受講群)と時期(PRE・POST)を独立変数、各尺度の下位尺度得点を従属変数とした2要因分散分析を行った。その結果を表9に示す。

交互作用で有意差が認められたのは、「知識」( $p < .05$ )、不安尺度では「支援活動」( $p < .001$ )、自己効力感尺度では、「コンサルテーション」( $p < .001$ )、「個別」( $p < .01$ )、「セルフケア」( $p < .001$ )、「実技」( $p < .01$ )であった。しかし、不安尺度の「自分自身」については、交互作用に有意な差が認められなかった。このことから、研修を受けたことによって、受講者の被災者支援に関する知識が

増えただけでなく、支援活動に対する不安が低下し、被災者支援で行うコンサルテーションや個別支援、セルフケアや実際の実技について自己効力感が上昇した。しかし、自分自身の状況に関わる不安については、研修による変化は認められなかった。この点については、家庭状況など個人のプライベートな側面は、研修により変容するわけではないため、変化が認められなかったことは妥当な結果であると考えられる。以上の結果から、本研修会が支援者の被災者支援に関する不安の低減および自己効力感の上昇に効果があったことが示された。

(3)職種による研修の効果

次に、研修による効果が職種によって異なるかを検証するため、各尺度得点のPOSTからPREの得点を引いた得点差を算出した。そして、その得点差を従属変数とし、群(受講群・非受講群)と職種(臨床心理士・保健師・養護教諭)を独立変数とした2要因分散分析を行った。その結果を、表10に示す。交互作用が有意だったのは、「コンサルテーション」であり( $p < .05$ )、受講群において保健師が臨床心理士や養護教諭よりもコンサルテーションの自己効力感が上がったことがわかった。

表9 研修による効果

		PRE				POST				F		
		N	受講群		非受講群		群	時期	交互作用			
			44	44	44	44						
知識	MEAN	10.48	9.86	12.07	10.30	8.96**	18.72***	6.15*				
	SD	2.38	2.58	1.56	2.02							
不安	支援活動	MEAN	3.89	3.60	3.31	3.67	.04	10.60**	17.75***			
		SD	0.93	0.88	0.84	0.81						
	自分	MEAN	3.59	3.52	3.51	3.50	.08	.40	.16			
		SD	0.83	0.81	0.82	0.77						
自己効力感	コンサル	MEAN	2.02	2.14	2.70	2.17	2.1	43.38***	38.79***			
		SD	0.73	0.81	0.50	0.78						
	個別	MEAN	2.02	2.17	2.45	2.27	.01	22.04***	8.71**			
		SD	0.79	0.77	0.62	0.73						
	セルフ	MEAN	2.80	3.05	3.19	3.09	.36	20.84***	13.76***			
		SD	0.59	0.72	0.44	0.66						
	実技	MEAN	2.55	2.58	3.31	2.67	4.02*	15.91***	9.85**			
		SD	1.06	0.90	0.51	0.90						

$p < .05^*$ ,  $p < .01^{**}$ ,  $p < .001^{***}$

表10 職種による研修の効果

		受講群			非受講群			F			
		N	臨床心理士	保健師	養護教諭	臨床心理士	保健師	養護教諭	群	職種	交互作用
			18	10	16	12	16	16			
知識	MEAN	1.17	2.40	1.56	.00	-.19	1.38	7.84**	1.28	2.16	
	SD	1.25	3.92	1.97	1.71	2.37	1.67				
支援活動	MEAN	-.52	-.76	-.53	.16	.05	.04	18.11***	.39	.17	
	SD	.93	.90	.62	.63	.58	.72				
自分	MEAN	-.07	-.24	.01	-.02	-.14	.10	.27	.83	.01	
	SD	.74	.92	.72	.26	.75	.70				
コンサル	MEAN	.51	1.14	.57	.09	-.01	.01	46.68***	2.90	4.43*	
	SD	.48	.71	.57	.35	.35	.36				
個別	MEAN	.25	.82	.40	.08	.08	.12	11.97***	2.03	2.21	
	SD	.43	.49	.59	.54	.53	.52				
セルフ	MEAN	.39	.66	.24	-.10	.04	.15	17.54***	1.55	2.94	
	SD	.63	.54	.41	.26	.39	.25				
実技	MEAN	.44	1.65	.56	-.13	.16	.19	15.19***	4.17*	2.59	
	SD	1.20	.88	.73	.68	1.03	1.00				

$p < .05^*$ ,  $p < .01^{**}$ ,  $p < .001^{***}$

IV.まとめ

2回連続で行った多職種合同の災害後の心のケアに関する研修会により、被災者支援に関する知識の上昇、および支援に対する不安が低減し、支援活動に対する自己効力感が上昇したことが示された。特に、研修を受講した保健師において、コンサルテーションに対す

る自己効力感が上昇したことがわかった。このことから、臨床心理士だけでなく、地域の支援者も交えた研修を行ったことにより、事前のスキルアップが図られることが示された。さらに、自由記述に「多職種の方と交流ができてよかった」という感想もあり、研修会を通して多職種間で顔が見える関係作りのきっかけを

提供できたと考えられる。

本研究は、平成 24 年度日本科学協会笹川科学研究助成により行われた。研修会に参加して下さった皆様、本調査にご協力、ご回答いただきました多くの皆様、関連機関・団体の皆様、そして大石博美氏に心より感謝申し上げます。

#### 引用文献

- Barton, A, (1969). *Communities in Disasters*. New York, Basic Books.
- 小林朋子・中垣真通・石川令子・吉永弥生・長島康之・今木久子(2011)被災者支援に関する研修内容とその効果について(2)－被災者支援に対する不安と活動に対する自己効力感の変容－, 日本心理臨床学会第 30 回秋季大会発表論文集, 605.
- 小林朋子・櫻井剛・中垣真通・長島康之・今木久子・石川令子・吉永弥生・江口昌克・福永博文(2011)東海地震に備えた臨床心理士の組織化および地域との連携に関する実践的研究, 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 19, 113～119.
- 長島康之・小林朋子・今木久子・中垣真通・吉永弥生・石川令子(2010)被災者支援に対する不安と、それを低減するための研修内容とは？(1)－被災者支援への不安や抵抗感について－, 日本心理臨床学会第 29 回秋季大会発表論文集, 416.
- 土屋廣人(2013)大規模災害に備えた静岡県臨床心理士会の取り組み, 日本臨床心理士会雑誌, 74, 34-36.